

平成 28 年の夏、長野県にお住まいの芝茜さん親子が剣淵町にお越しになり、地域おこし協力隊が町内を案内したことがありました。その際のエピソードを芝さんが J T B 交流文化賞に応募したところ、第 13 回 J T B 交流文化賞一般部門最優秀賞を受賞されました。

今回はその文章「ひみつの夏休み」をご紹介します。

目覚めたときの光で、今日は快晴だとわかった。

アラームの音で起こされた娘も、寝転んだまま目を開けずに思い切りのびをしている。

急いで身支度をととのえて、食堂へと下る。

「おはようございます！」

おかみさんとご主人の明るい笑顔に迎えられて、席に着く。

自分以外の誰かが作ってくれるごはんはそれだけで嬉しいのに、焼き鮭、生卵、海苔、納豆、いくら醤油づけ…少しずつたくさんの種類が盛り付けられた旅館ならではの朝ごはんは、特別に幸せだ。

娘の手が届かないよう味噌汁を遠ざけ、こぼしたご飯粒を拾い、残した牛乳を飲みほす…と、いつも通りせわしなかったけれど、胃袋は十分に満たされて、エネルギーの消費を待ちわびている。

旅立ちを決めたのは、出発のわずか二日前だった。

反対されることは目に見えていたので誰にも告げず、まだほとんど口もきけない一歳五ヶ月の娘と二人きりの、無計画で無鉄砲な往復三千キロの旅。

行き先は北海道・剣淵町。ガイドブックには載っていない、三十年ほど前から絵本で町おこしに取り組んでいる小さな田舎町だ。

何年か前に観た、この町で撮影された映画の、明るい田園風景がずっと心に残っていた。

一人でする育児に悩み、けれど心配はかけたくないという思いから誰にも打ち明けられず、寂しさや劣等感が募ってどうしようもなく行きづまっていた夏のある日、ふいに剣淵の情景が脳裏に浮かんだ。

スマホで『剣淵』と検索すると出てきた町役場の番号に、即座に電話をかけ、「長野県に住んでいる者ですが、剣淵への行き方を知りたいんです」と唐突に尋ねる。映画で観た風景や絵本への興味を話すと、電話口の男性は、「そうですか～！ぜひ来てください！」と気さくに、詳しいルートを教えてくれた。

思いつきは急に現実味をおび、その勢いで飛行機の便を検索し、逆算して地元の駅からの出発時刻を調べ上げた。ハイシーズンなので、旅にかかる費用はアルバイトのお給料三ヶ月分。自分のためにお金を使う余裕などない生活をしていた私には、大きな決断だった。

初めての国内線の飛行機、レンタカーの運転、幼い娘を連れていくこと…不安は尽きなかったが、期待の方が勝り、翌々日には、ほんものの空を飛んでいた。

旭川空港でレンタカーを借り、高速道路かと錯覚してしまうような、信号のない長い長い道路をひたすら走り続け、剣淵にたどり着く。

無事に着いたという安堵と、どこまでも静かな、静かな夜は、日ごろ寝つきの悪い私に、あっという間にまぶしい朝を連れてきてくれた。

朝食をすませ、旅館からほど近い剣淵町役場に向かった。

町づくり観光課の係長さんは「まさか本当に来てくださるとは」と目を丸くし、「おーい、みんな写真撮ろう！」と職員に呼びかけ、『絵本の里けんぶち』という大きな横断幕の前で集合写真を撮ってくれた。



観光マップをもらうだけのつもりが、思いがけず地域おこし協力隊の二人が町を案内して下さることになった。すらっと背の高い男性の鈴木さんは剣淵出身でUターン、くりっと大きな目をした女性の今井さんははるばる大阪から来たのだという。

町内の説明を受けながら、絵本作家のあべ弘土さんの壁画がある小学校へと向かう。広い校庭の脇に車を停め、壁画の真下まで近づく。

校舎の壁面には、北海道の冬景色が描かれていた。

大きくのびやかに羽を広げたシマフクロウは、壁をぬけ出して、広い青空に向かって今にも飛び立ってしまいそうだ。

その澄んだ青は、私が人生で目にした空色の中でもとびきりだった。

ロケ地になったバス停に向かう道で、畑に広がるレモン色の花は何かと鈴木さんに尋ねると、「菜の花ですよ」と言われて驚いた。